ISSN　0915-9266

ネットワーク 資料保存

第113号　2016年3月

日本図書館協会
資料保存委員会

展示「文化財を保存する技術」の開催まで

高田高史

神奈川県立川崎図書館は科学技術系に特化した公共図書館である。科学技術系の所蔵資料をさまざまな切り口で知っていただこうと、年に４回、展示を開催している。所蔵資料の紹介はもちろん、当館の活動がメディアに取り上げられる広報効果や、準備を通してスタッフのスキルアップにつながる、などのメリットがある。今回、「文化財を保存する技術」（2015年11月13日から2016年２月10日まで開催）という展示を開催したので、本欄で紹介させていただく。なお、執筆時点では開催期間中なので、開催するに至った経緯から開催開始までを中心に記すことにする。

１．企画に至るまで

以前から「文化財」をテーマに企画をしたいというプランを温めていた。文化財に関連する展示は、たいてい、歴史的背景や美術史・民俗学的な展示になるが、保存の技術という切り口だと、科学技術系の範疇に入る。さまざまな技術が文化財の保存を支えていることを知っていただきつつ、当館の利用者の新規開拓につなげたいという意図があった。

また、当館では、歴史的な建築物をはじめとする文化財調査報告書等を多数、所蔵しているが、こうした資料を所蔵している認知度は十分ではないと感じていた。展示を通して文化財調査報告書等の所蔵をPRする狙いもあった。

なお、私を含め今回の展示を担当する科学情報課に文化財への関心を持っているスタッフが多いこと、図書館における資料保存との関連から馴染みやすいテーマであることも理由にあげられる。これまで多くの展示に携わってきたが、スタッフが興味を持てるテーマのほうが楽しく準備を進められるし、より力の入った内容になる傾向は感じていた。

２．文化財保存・復元技術展

こうしたプランを実行に移そうと考えていた時期、第１回文化財保存・復元技術展（2015年７月22日から24日）が東京ビッグサイトにて開催されることを知ったので、参加を申し込んだ。おもに文化財関係者を対象に、企業・団体が製品や技術を紹介する催事である。文化財保存の技術で展示を企画している我々にとっては、さまざまな技術を知ることができる、またとない機会であった。私およびスタッフ２名で参加し、会場の各ブースをひととおり見たあと、「あの技術を紹介したい」「パネルを貸してもらえないかな」などと話し合いながら、いくつかのブースを再訪し、「じつは図書館なのですが…」と説明しながら担当者と名刺交換をしたり、過去

CONTENTS

展示「文化財を保存する技術」の開催まで……高田高史　1
「国立公文書館の資料保存、これから」＊デジタル版は不掲載……中村愛子　3
〈参加報告〉JHK第９回資料保存シンポジウム「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブ」―資料の保存と今後の展望―……岡崎由里子　7
〈参加報告〉第101回全国図書館大会第15分科会「デジタル化のリスクに向き合う～そのデータ、10年後も使えますか？～」……田村ゆかり　8
〈参加報告〉資料保存委員会主催製本工場を見学しよう……内山典子　9
資料紹介　BOOK『日本カセットテープ大全（タツミムック）』……10
図書館災害対策委員会について……11
資料保存委員会の動き／editor's desk……11

の展示の実績をまとめた資料を渡したりした。ブースの担当者も、こうした依頼は想定外であっただろう。後日、メールや電話等で、あらためて打診し、多くの企業・団体から展示品借用の快諾をいただいた。

図書館での展示は、基本的に所蔵資料がメインになると考えている。しかし本を置くだけでは、やや地味な印象になる。モノを展示することで見栄えがするし、話題性も増すので、当館では所蔵資料の紹介と併せて、企業・団体等から品物やパネル等を借りることが多い。

なお、文化財そのものを展示することは、当館の設備や、万が一の破損時の対応を考え、当初から全く考えていなかった。

３．県立の博物館・東京文化財研究所の協力

企業･団体から展示品を借用するだけでなく、文化財を保存する現場で、どのような技術が用いられているのかも紹介したかったので、神奈川県立歴史博物館と神奈川県立金沢文庫をクローズアップすることにした。同じ教育委員会内の機関として協力を得られやすく、当館で展示を見た方が実際に歴史博物館や金沢文庫を訪れる相乗効果が期待できるという考えもあった。上司を通して先方に趣旨説明や協力依頼をしてもらったので、話も進めやすかった。

さっそく、県立歴史博物館と県立金沢文庫の学芸員を取材し、現場での保存の技術をパネルにまとめて紹介することにした。日頃、知る機会の少ない博物館のバックヤードについて、わかりやすく説明をしていただいた。

また、この取材を含め、保存の技術について調べていると、東京文化財研究所が大きな役割を果たしていることがわかった。趣旨説明をして、担当者を訪問し、助力を依頼した。結果、東京文化財研究所からは、さまざまな計測機器やパネル等を借用することができた。東京文化財研究所からほど近い東京国立博物館（本館）の17室で「保存と修理」の常設展示をしているので、ぜひ見ておいたほうがよい、と有益な情報もいただいたので見学し、展示のイメージを膨らませることもできた。

さて、当館では展示とあわせて関連講演会を開催するのが通例になっている。展示で得た興味を深める機会になる、講演が来館・利用の機会になる、さらなる広報に結び付きやすくなるなどの目的・効果がある。

今回は、上記の取材や借用等で対応をしてくださった、東京文化財研究所保存修復科学センターの吉田直人氏、県立歴史博物館学芸員の嶋村元宏氏に、文化財保存に関する講師を引き受けていただけた。

４．借用した品物と所蔵資料のPR

秋になって、文化財保存・復元技術展で名刺や資料をいただいた企業･団体に連絡をとって、借用の手配を進めていった。展示のスペースの関係で断念せざるを得なかったものもあるが、具体的には以下の品々を借用することができた。

・シロアリの被害にあった材木、パネル等（関東しろあり対策協会）
・復元タイルおよびオリジナルのタイル等（株式会社アカイタイル）
・免震装置の模型等（THK株式会社）
・ 文化財用の照明に関するパネル、LEDライト等（東芝ライテック株式会社）
・ ３Dレーザースキャナを用いて作成した模型、パネル等（株式会社計測リサーチコンサルタント）
・ 左官業の道具、左官で用いる土などのサンプル、復元工事の記録映像等（株式会社あじま左官工芸）

また、県立歴史博物館、東京文化財研究所からも、保存の技術に関するさまざまな機器類等を借りることができた。

・中性紙封筒、アーカイバルボード、綿ぶとん、採取虫記録用紙、アスマン通風乾湿計、脱酸

素材、害虫トラップ、ホウ酸団子、パネル等（神奈川県立歴史博物館）

・ デジタル温湿度計、温湿度データロガー、放射温度計、照度計、紫外線計、調湿剤、パネル等（東京文化財研究所）

県立歴史博物館の借用品にある、中性紙の封筒や、アーカイバルボードを用いた保存箱は、図書館で用いている保存用品と同じようなものであった。採取虫記録用紙は、博物館内で発見された虫が、文化財に害をもたらす虫なのかなどを調べ、その対策をたてる用途で使われていて、用紙には「その虫、まだ捨てないで！」「個体はこの用紙とともにご提出ください。ぐちゃっとなっていてもかまいません。」などと記載されていた。

東京文化財研究所からは、おもに測定のための機器類を借用した。博物館の学芸員を対象にした研修等で使用しているものだそうである。

それぞれの展示品には、必要に応じて簡単な説明パネルを作成した。もちろん出典を明示し、所蔵資料の利用につながるようにしている。

ほかにも、関連資料の紹介は積極的に行った。本来であれば、手に取れるかたちで展示コーナーに所蔵資料を並べたいのだが、そうしたスペースや設備はない。今回は、おもに書影と本の内容のキャプションをパネルにして展示した。たとえば、岡崎市にある旧本多忠次邸で用いた復元タイルの展示の近くには、所蔵している同邸の移築復元工事報告書のパネルを作成して並べた。

展示品と直接の関係はなくても、文化財と関連のある本はパネルを作成し展示会場で紹介していった。また、各地の文化財調査報告書は、おもに書影を展示会場に掲示して所蔵をアピールした。

展示を通して所蔵資料を知るきっかけにしたいというコンセプトを中心に据えて取り組んできたし、今後も、さまざまな切り口で所蔵資料の魅力を紹介していきたい。

（たかだ　たかし・
神奈川県立川崎図書館科学情報課司書）

No Image

No
Image

No
Image

No
Image

No Image

＜参加報告＞
JHK第９回資料保存シンポジウム「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブ」―資料の保存と今後の展望―

岡﨑由里子

2015年10月５日（月）、一橋大学の一橋講堂中会議場にて行われた資料保存シンポジウム（参加者177名）の報告を行う。このシンポジウムは講演３本、参加企業による資料保存実用講座、企業展示で構成されていた。以下、それぞれの講演等について概要と所感を述べたい。

まず最初は、関西大学総合情報学部准教授研谷紀夫氏による「表象文化研究とデジタル文化資源」の特別講演だった。デジタルアーカイブの重要性について述べられた発表で、表象文化研究とは何か、という説明からはじまり、デジタル化された資料を活用することで研究に広がりが出るとの話があった。表象文化研究とは表象文化（絵画、写真、映画、漫画など）を芸術的解釈ではなくその背景となる出来事や情報、どういった伝わり方をしたかといったような点に注目する学問である。この講演は「写真」をテーマに話が進められた。たとえば、旧千円札の伊藤博文の肖像写真には、もう１枚同時に撮った印象の違う写真が存在する。２枚の写真を比較し、その印象の違いが持つ意味、写真がどのように伝わってきたか、人々にどんな影響を与えたかという説明は興味深かった。今後も多くの写真がデジタル化され、公開されることで新たな視点から研究を進めることができるとのこと、また、ハブ機能を持った機関等に集約することが大切との提言があった。

次に、東京都立中央図書館の眞野節雄氏より、「大津波からよみがえった郷土の宝―陸前高田市立図書館　郷土資料の修復―」の特別講演が行われた。このレスキュー活動に関する概要と、被災資料の受け入れから修復後、返還に至るまでの手順が説明された。震災後、救出に関わることになった経緯、当時の陸前高田市立図書館の様子、修復したのはどのような資料だったかなど、実際に関わった人でしかわからないことを、エピソードを交えて話があった。津波で水損した資料の救出のために行った作業・処置の手順は、今後、災害が起こった時にも参考となるものである。また、第１次受入資料の返還を記念して作成された記録動画の紹介があった。

休憩と参加企業による展示の後は、国立公文書館館長加藤丈夫氏による基調講演「公文書の重要性と次世代につたえていくことの大切さ」だった。まず、公文書館とは何か、どのような機能を持つかといったことを諸外国との比較もしつつ説明された。日本の公文書館は第２次世界大戦後多くの公文書が失われた点、また、文化の違いなどから資料の数も公文書に関わる職員の数も圧倒的に少ないという。公文書管理のルールが2011年に制定され、作成された文書の保存・公開までの流れができ、今後機能の充実が求められている。今後の課題としては管理に関するルールの徹底、利用者へのサービス、デジタル化、アーキビストの養成などが挙げられた。利用者へのサービスでは展示学習機能の強化としてケネディ大統領に関する資料を集めた「JFK―その生涯と遺産」展に期間中４万人の来館があったという成功例が述べられた。

最後に、参加企業による資料保存実用講座では、それぞれの企業と商品の紹介があり、温湿度管理、脱酸、保存容器、デジタル化などの技術の説明があった。

今回のシンポジウムに参加して、資料の保存は単に修復の技術だけでなく、環境管理、危機管理（防災）、デジタル化とそのデータの管理などますます広がりを持ち、視野を広く持たなければならないことが感じられた。現在の状況だけでなく今後どのように残し、活用されていくのかも日々意識していかねばならない。最近

の資料保存をとりまく環境や考え方・ニーズを知る良い機会となった。

（おかざき　ゆりこ・東京都立中央図書館）

＜参加報告＞第101回全国図書館大会第15分科会「デジタル化のリスクに向き合う～そのデータ、10年後も使えますか？～」

田村ゆかり

平成27年10月16日、標記分科会が開催され、資料のデジタル化そのものではなく、デジタル化データの保存に光を当てたテーマに興味を抱き参加した。会場は多くの参加者で溢れ、強い関心を示していた。

国立国会図書館関西館の本田伸彰氏による基調報告では、「デジタルデータの長期保存とその課題」と題し、ユネスコ・IFLA（国際図書館連盟）・ICA（国際公文書館会議）の共同プロジェクトが推進する「PERSIST」の取組みを中心に、現在の動きを噛み砕いて説明していただいた。

ここでポイントとなる考え方として「キュレーション」が紹介された。キュレーションとは、デジタル化データを作成・評価・選別・受入し、保存・利用、さらには媒体等の変換・廃棄といった一連のサイクルを指す。この考え方を広く普及させる目的で、アメリカで行われている活動の一つに「Personal Digital Archiving」があり、ここでは、デジタル写真やホームビデオ、電子メールなどの家庭向け・個人向けデータの保存に関する知識を提供することにより、個人レベルで保存の重要性を認識してもらい、ひいてはキュレーションの社会的関心を高めようとするもので、非常に面白い試みであると感じた。

続いて、東京都立中央図書館の平安名道江氏より、自館で実施したデジタル化データのマイグレーション（移行）について報告があった。東京都立中央図書館では平成13年頃より資料のデジタル化を開始し、CD-RやDVD-Rで保存してきたが、このうちの何点かをピックアップして点検したところ、保存状態が良好のものは僅か２割程度であったため、平成25年度から２か年に渡り、推奨DVD-Rへのデータ移行作業（委託）を行ったとのことである。筆者がイメージしていたものより、費用も廉価でかつ短期間で作業できる印象を受けたが、分科会の時間の都合上、具体的な作業方法などの話が少々割愛されたのは残念である。

最後に、公益社団法人日本文書情報マネジメント協会（JIIMA）アーカイブ委員会光メディアワーキンググループの竹島秀治氏より、長期保存用光ディスクに関する報告があった。

筆者は「光ディスクは比較的データの長期保存が可能」という認識は持っていたが、JIIMAの測定によると、経年劣化やドライブとのマッチングの問題等で、一般市販ディスクのなかには長期保存に向かないものが存在する。そこでJIIMAでは平成27年度よりアーカイブ用光ディスク製品認証制度をスタートさせ、最適なディスクとドライブを、利用者が容易に選択できる環境を整備したということである。併せて、ディスクの構造についても詳しく解説していただいた。特に、記録膜に特殊な色素を使用したり、反射膜に銀合金を使用することで、ディスクの耐久性・信頼性の向上に努めているという話題を通じて各メーカーの高度な技術力を改めて知ることができたほか、耐性試験の一環としてディスクを一定期間海水に浸したところ、再生可能レベルのエラー値であることが確認でき、大雨による浸水や津波にも耐え得るといった製品情報は、水辺に位置する筆者の図書館にも大変有益な内容であった。

筆者の所属する図書館では、県内関係機関と協同で、各館の貴重資料をデジタル化したものを「越後佐渡デジタルライブラリー」としてホームページで公開［http://www.pref-lib.niigata.niigata.jp/Archives/］しており、これらのデータの保存に光ディスクを用いている。今後はコレクションの構築作業と並行して、デジタル化データの保存の面においても、今回の分科会で得られた知識を活かしていけたらと思う。

（たむら　ゆかり・新潟県立図書館）

＜参加報告＞
資料保存委員会主催製本工場を見学しよう

内山典子

2015年11月９日（月）、株式会社ブロケード浮間工場見学をさせていただいた（25名参加）。製本の現場を拝見するのは初めてでとても興味深く、あっと言う間に時間が過ぎてしまった。修理過程を思い浮かべながら工程を見て回る。しかし、機械の動きが速いので、写真は失敗続き。そうか、動画を撮ればいいのだとやっと気付いたのが見学終了間際であった。唯一撮れた動画は三方断裁機だったが、動きが面白くて、帰宅後繰り返し見てしまった。

印刷業は活版からオフセットへと根本的な変化を遂げた。けれども、製本業は職人の手作業だった24の工程を、それぞれ機械に置き換えただけなのだという。そのせいか、どこか人間臭い。ブックデザイナーの祖父江慎さんが製本工場見学記で「可愛いね」と書いているのもうなずける。そして、その機械を使いこなすのも、寸分の加減、接着剤の選び方、と長年の勘が必要らしい。まだまだ、職人の世界なのだ。

株式会社ブロケードは、平成13年に関山製本社と黒田製本所の合併により設立。しかし、両社はそれぞれ明治以来の長い歴史を持ち、社名は両社屋があった神田錦町の“錦”から付けたとのこと。

11月は本来ならば最繁忙期なんです、と話すのは黒田会長さん。見学を受け入れることができたのは、仕事がないからです。今日の仕事は2,000冊だけです、20分ほどで終わってしまいますと、大変な台所事情をさらりとおっしゃる。

出版不況と言われるようになって久しい。製本専門業者は単価の低下や納期短縮を要求されるうえ、印刷会社などが製本も社内で行う内製化により仕事そのものが減少するという厳しい状況にあるらしい。並製本が中心になり、職人技を発揮する上製本も減ってきた。長年培ってきた技術も、失われる瀬戸際にあるのかも知れない。

見学させていただいて、きっちり貼られた各出版社の仕様書、乱れなく並んだ金型に、スピードよりも丁寧さを心がけているという仕事への姿勢が伝わって来た。また、ご高齢の人も一緒に働いていること、見学終了時に会長さんが真っ先になさったのは従業員への労いの声掛けであったことなど、家族的な雰囲気のある温かい会社だと感じた。

時勢とは言え、職人の勘や手わざ、実直な職場が失われて良いものかと思う。また、機能美に包まれた上製本は一つの文化でもある。

製本工程の機械化によって、庶民も本を気軽に買えるようになった。書物は畏敬すべき対象から娯楽へ、そして消費するものへと変わって来たように思う。

これからは賢く使い分ける時代であろう。情報を逸早く得るには電子書籍等、普段の読書は廉価な並製本。けれども、繰り返し開きたい上質な文学には、見た目の美しさや手触りも共に味わえる上製本がやっぱり嬉しい。

公共図書館には買い支えるという役割もある。装丁と内容のバランスを見抜く力を付けることも必要だろう。下支えする自覚と、地道な努力が文化を守ることにつながるのではないだろうか。

（うちやま　のりこ・NPO法人げんきな図書館）

『日本カセットテープ大全（タツミムック）』

●144頁／A5版　●2015年７月　1,400円+税
●ISBN：978-4-7778-1494-7　●発行：辰巳出版株式会社

はじめに
カセットテープの世界へようこそ
懐かしのカセットテープ小僧
思い出のカセットテープカタログ（ソニー編・TDK編・maxcel編・その他のメーカー編）
maxcelインタビュー「ご要望がある限りカセットテープを作り続けたい」
日立マクセル株式会社　乗松幸示
カセットテープ考現学　DUG・松崎順一
懐かしのテープグッズ狂想曲
昭和カセットテープCMデータベース
カセットテープヒストリー
カセットテープお作法講座
ミュージックテープの現在と未来　“国産ミュージックテープ”はどこで作られているのか？
カセットテープの時代に会いに行く―昭和に出会える電気店、岩手・三共無線
あとがき

近頃、カセットテープ復活の声が聞かれる。音楽はダウンロードするものと思っている若い世代には、CDすら「買う意味が分からない」と言われることを考えると奇妙な感じもするが、その若い世代には、ノイズのある、あの音が新鮮なのだそうだ。もちろん、カセットテープは高齢者にはなじみのある媒体である。生テープ（録音用）はカラオケの練習用等、根強い需要があり、CD全盛の時期でも、ミュージックテープは演歌中心に細々と出されていた。ところがここにきて、インディーズ系が加わるなど、話題を振りまいているのである。再生機器も、まだ販売されている。

本書は生テープを中心として、70～80年代に青春時代を過ごした人に郷愁を感じさせるのはもちろん、現在の事情もよくわかる内容である。全体的に軽く読めるが、内容はわりと奥が深い。残念なのは「大全」としながらも、主眼であるテープの種類が完全網羅ができているわけではない。それでも記録媒体のひとつである、カセットテープに特化した資料という意味では、意義がある。

図書館資料としてのミュージックテープは、さすがに利用はほとんどなくなっている。ビデオテープも同様だが、保存の問題も加わって、提供の中止という事態も生じている。長期間利用されないため、テープの固着、転写といった症状が発生しているほか、再生時に機械に巻き込まれてテープはもちろん、再生機器にもダメージを与えるといった事故が起きている。メンテナンスや保存環境に関する情報はWebでも探せるが、紙媒体では意外と少ない。

なお、障害者サービスのなかで録音資料製作を行ってきた図書館では、保存のノウハウがあった。製作を主眼とした資料ではあるが、『音訳マニュアル　録音編　視覚障害者用録音図書製作のために』（全国視覚障害者情報提供施設協会レコーディングマニュアル改訂委員会／編　全国視覚障害者情報提供施設協会　2001.4　ISBN　4-925053-68-X）などもあわせて、カセットテープの保存を見なおしてはどうだろうか。（編集部）

図書館災害対策委員会について

2016年２月３日､日本図書館協会（以下、日図協）において、第１回図書館災害対策委員会が開催されました。委員会には、理事２名、東日本大震災対策委員、施設委員会、資料保存委員会､「こんなときどうするの？」編集チームより各１名ずつと、ボランティア経験者３名、このほか第１回の会議にはオブザーバーとして、資料保存委員会の眞野委員長も参加しました。

この委員会の任務は、以下のように規定しています（図書館災害対策委員会規定第２条)。

「図書館関係者の防災意識を高めるとともに、災害が発生し、図書館に被害が及んだ場合又は被害が及ぶと想定される場合、当該図書館に対する支援活動を速やかに行うことができるよう、次に掲げる事項を任務とする。

⑴被害状況の確認及び情報収集
⑵関係機関等との支援対策の協議及び連絡調整
⑶防災や災害支援に関する情報収集
⑷支援のための募金活動
⑸その他災害対策のために必要な事項」

これまで日図協では、1995年の阪神・淡路大震災では発生３か月後に「阪神・淡路大震災関西対策委員会」を、また、2011年の東日本大震災では１週間後に「東日本大震災対策委員会」を立ち上げ、活動してきました。しかし、火山の噴火、集中豪雨や台風による風水害等、自然災害は地震だけではありません。

2015年「平成27年９月関東東北豪雨」による常総市立図書館の被災が契機となって、関係委員会等からも立ち上げの必要性を説く意見もあり、恒常的な活動ができる図書館災害対策委員会が発足したわけです。これに伴い、東日本大震災対策委員会は小委員会という位置づけになります。

第１回の会議では、各委員会、チームの活動報告や情報交換を行い、まずは災害発生時に日図協に連絡してもらえるよう、ホームページの立ち上げを準備することとなりました。また、課題を整理し、当面の対応を確認しました。

資料保存委員会も、これまで東日本大震災対策委員会に協力する活動をしてきましたが、災害対策委員会でも同様に活動してまいります。

資料保存委員会の動き

９月定例会

日時：2015年９月17日（木）
場所：日本図書館協会会議室
出席：９名
内容：
報告事項（「ネットワーク資料保存」：112号発行予定と内容／HP：掲載情報候補（主催イベント他））
協議事項（大会：担当確認、参加申込状況、当日までの予定、当日スケジュール・手続き確認／セミナー「国立公文書館の資料保存、これから」：日程及び講師決定、広報、当日準備の確認／製本工場株式会社ブロケード見学会：日程・現時点委員会参加者確認）
その他（JHKシンポジウム「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブ」：当日役割、準備最終確認／NDL資料保存フォーラム：日程情報／委員会HP内「リーフレット資料保存」の存続検討）

JHK共催第９回資料保存シンポジウム「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブ」

日時：2015年10月５日（月）
会場：一橋大学一橋講堂中会議場
参加者数：177名

第101回全国図書館大会第15分科会「デジタル化のリスクに向き合う～そのデータ、10年後も使えますか？～」

日時：2015年10月16日（金）
会場：国立オリンピック記念青少年総合センター310研修室
参加者数：115名

10月定例会記録

日時：2015年10月21日（水）
場所：日本図書館協会会議室
出席：７人
内容：
報告事項（大会：参加者数、記録・アンケート

集計確認、感想･反省･102回の日程候補･会場情報／「資料保存ネットワーク」：112号完成、113号企画募集／JHKシンポジウム「後世に伝えるための資料保存とデジタルアーカイブ」：参加者数、名簿、アンケート確認中）セミナー・見学会／セミナー「国立公文書館の資料保存、これから」：日時・会場決定／製本工場株式会社ブロケード見学会：日時・参加者応募状況・締切・準備の確認）

協議事項（図書館災害対策委員会：準備会に際し、当委員会に期待されること、窓口の必要性／HP：「リーフレット資料保存」ほか、既に役割を終えたと考えられるコンテンツの見直し、リンク集やHP全体の構成等についてリニューアルを考える／セミナー：次回の候補検討）

その他（委員会の金銭管理について／次回、12月以降の協議事項確認）＊11月は休会

見学会「製本工場を見学しよう」

日時：2015年11月９日（月）

見学先：株式会社ブロケード浮間工場

参加者数：25名

資料保存セミナー「国立公文書館の資料保存、これから」

講師：国立公文書館 業務課 保存係長 中村 愛子氏

日時：2015年12月４日（金）

会場：日本図書館協会 ２階研修室

参加者数：48名

12月定例会

日時：2015年12月17日（木）

場所：日本図書館協会会議室

出席：10名

内容：

報告事項（図書館災害対策委員会：設置と委員選出／「ネットワーク資料保存」：会計報告および今後の取り扱い、インターネット公開の見通し、113号内容、企画／セミナー「国立公文書館の資料保存、これから」：報告と反省／次回見学会候補および今後の進め方について）

協議事項（HP：校正案検討、コンテンツの整理と追加、作業工程）

2016年１月定例会

日時：2016年１月20日（水）

場所：日本図書館協会会議室

出席：８名

内容：

報告事項（災害対策委員会：２/３第１回会議、眞野委員長と窓口・宮原が参加予定／２/17ネパール国立図書館長報告会：参加希望者確認／2016事業計画：例年通り特に予算計上せず／大会：記録の校正終了、HPリンクの可能性／「ネットワーク資料保存」第113号内容と進捗状況、114号企画／製紙工場見学：広報、日程調整、他の見学会候補／セミナー：候補検討）

協議事項（HP：トップページおよび内容・リンク先検討、被災資料救済リンク集・関連機関リンク集見直し／大会：分科会テーマ検討）

その他（セミナー、見学会の案、次回の課題）

editor's desk

東日本大震災から早くも５年がたちました。また、平成27年９月関東・東北豪雨水害で被災した常総市立図書館の仮設図書館が、仮設図書館を３月１日にオープンさせています。そんななかで、日本図書館協会に図書館災害対策委員会が生まれ、資料保存委員会も協力することになりました。防災も含めた活動をご期待ください。

ネットワーク 資料保存　第113号　2016年３月

編集・発行：日本図書館協会　資料保存委員会
〒104-0033　東京都中央区新川１-11-14
☎03-3523-0812　FAX 03-3523-0842
印刷：船舶印刷株式会社
用紙：北越製紙クリームキンマリ
年間購読料：2000円（年４回刊行、送料込み）
定価：本体価格476円（税別）